

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	馬 達
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
中国語母語話者の漢字単語の音韻情報処理の特徴 —日本語母語話者との比較を通して—			
論文審査担当者			
主 査	教 授	森 田	愛 子
審査委員	教 授	中 條	和 光
審査委員	教 授	湯 澤	正 通
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、中国語と日本語の母語話者を対象とし、漢字単語の読みにおける両者の言語処理、特に音韻情報処理が異なることを実証したものである。本論文は以下の5章から構成される。</p> <p>第1章では、中国語と日本語では共通して用いられる漢字が多く、両者の言語情報処理が同一視されがちであるという研究の背景と、その一方で、中国語と日本語の音韻システムには大きな違いがあり、両者の音韻情報処理が大きく異なっている可能性が述べられた。それらをふまえて、本論文では、両者の違いを明確にするために、次の2つの観点に着目して検証を行っている。1つは、音韻情報処理には、構音コントロール過程を経るか否かによって、articulatory と non-articulatory という質の異なる2つの音韻情報処理が存在することである。もう1つは、言語の記憶における音韻情報や形態情報の用いられ方の違いである。</p> <p>第2章では、3つの実験を行い、中国語母語話者の中国語漢字単語の音韻情報処理が、日本語母語話者の日本語漢字単語の音韻情報処理とは異なることを実証している。実験では、同音判断という音韻情報処理の必要な課題遂行時に、課題と無関係な語を繰り返し発声する構音抑制を課して、言語情報処理時の構音コントロール過程を妨害する手法が用いられた。構音抑制によってパフォーマンスが妨害されれば、その課題では構音コントロール過程を用いる articulatory な音韻情報処理が行われており、妨害されなければ、構音コントロール過程を用いない non-articulatory な音韻情報処理が行われていることがわかる。研究1-1では、日本語母語話者を対象にした先行研究と同じ方法で、中国語二字単語の同音判断課題を用いた実験を行った。日本語母語話者の場合は構音抑制によってパフォーマンスが妨害されなかったが、研究1-1では構音抑制によって誤反応が増大した。日本語母語話者は、構音コントロール過程を経る処理をあまり必要とせず、単語全体の音韻情報を用いやすいが、中国語母語話者はそれとは異なり、構音コントロール過程を経る音韻情報処理を行いやすいことが明らかになり、両者の音韻情報処理が質的に異なることが実証された。研究1-2では、中国語一字単語を用いて同様の実験が行われた。研究1-1とは異なり、一字単語は単語全体の音韻情報を細分化する必要がないため、構音抑制の効果は表れなかったが、構音抑制の効果は全くなかったとは断定しきれない結果であった。そこで研究1-3では、中国語の特徴であり、かつ、articulatory な音韻情報処理であるアクセントが利用されている可能性について検証するため、中国語一字単語のアクセ</p>			

ント判断課題を用いた実験が行われた。その結果、明確に構音抑制の効果がみられ、中国語母語話者が *articulatory* な音韻情報処理を行う背景に、アクセントの重要性があると示唆された。

第3章では、第2章の母語での実験結果を受け、中国語母語話者が *articulatory* な音韻情報処理を行う傾向は、第二言語である日本語の処理においても保持されるか、その傾向が学習者の日本語学習レベルによって異なるかが検証されている。研究2-1では、日本語母語話者を対象とした先行研究と全く同じ方法で、日本語二字熟語の同音判断を課す実験を行った。その結果、中国語母語話者の日本語二字熟語の処理時には、*articulatory* な音韻情報処理が行われることを明らかにした。研究2-2では、刺激の難易度を調整して同様の実験を行い、音韻変換スキルの高い学習者と低い学習者における構音抑制の影響を比較している。その結果、スキルの高い学習者は日本語母語話者に近い音韻情報処理を行うという予測とは異なり、むしろスキルの高い学習者のほうが構音抑制の影響を受けていた。中国語母語話者の場合、日本語が上達するほど日本語母語話者と同じタイプの処理を行うようになるとはいえ、むしろ、音韻変換が速いために、*articulatory* な音韻情報処理に頼りやすい可能性を示した。

第4章では、両母語話者に漢字一字単語の系列再生課題を課し、中国語母語話者が漢字の音韻情報を優先的に利用するという仮説を検証している。系列再生課題において、記憶する単語が互いに音韻的に類似している場合、そうでない場合より再生成績が低下する現象である音韻類似性効果と、形態的に類似している場合、そうでない場合より再生成績が低下する現象である形態類似性効果の生じ方を比較した。記憶する項目が少ないときと多いときを比較することで、どの情報を、項目が少ないときから優先的に利用するかを検討した点が特徴的である。実験の結果、中国語母語話者において形態類似性効果がほとんどみられず、音韻類似性効果が表れたため、音韻情報による処理が十分にできなくなった場合にのみ形態情報を利用する可能性が示された。日本語母語話者においては、音韻類似性効果のみが有意であったが、音韻類似条件と形態類似条件の間の差も有意ではなかった。再生率を見ても、中国語母語話者に比べ、音韻情報を優先的に利用していたとは言い難い結果であった。中国語母語話者のほうが日本語母語話者より音韻情報を優先的に利用しやすいことが実証された。

第5章では、第4章までの研究成果をまとめ、第1章で紹介した中国語と日本語の音韻システムの違いに基づいて考察を行っている。さらに、本論文の結果のみでは十分なエビデンスが得られなかった研究3の課題や、第二言語学習に適用するために発達・学習に考慮した実験を行う必要性が述べられた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。第1に、これまで、特に非漢字圏では軽視されがちであった中国語と日本語の言語情報処理の比較を行っており、かつ、今までに全く知見のなかった質的違いの存在を実証した。第2に、母語の言語情報処理が第二言語学習にも影響することを検証し、互いの第二言語学習者の課題である漢字の読みの学習に示唆を与えた。第3に、中国語母語話者が音韻情報を利用しやすいという、これまでも指摘されてきた点について、新たな方法を用いて明確なエビデンスを提供し、かつ日本語母語話者との比較を行った。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和5年2月16日